

I町

永い永い喪がようやく明けたとおもったら、
またべつの大切な誰かをうしなつたように、
ふたたび闇につつまれる

この「I」という名の町で

いや——、闇というのはこのぼあい
適切ではないかも知れぬ

壁——、四方を黒い壁に囲まれた
といったほうが正しいかもしれない

闇が壁のごとくに厚みを増す

あるいは壁が闇さながらに黒みを増す

——この、Iの町で

しかし不思議と息苦しくはない
むしろいたって安らかである

そして左手拇指の付け根にはあの——

痙攣をともなつて

その痙攣の暗やみのなかでわたしは、いたずらに絵筆を持たされ、画を描けと命ぜられた画工そのものだ

それは水の中で文字をしるすようで、まるで心もとない

叫びを發したところで、水の中では誰に伝わりようもない

よし何かを刻みつけたとしても、水の中で誰との対話が可能だというのか

ブリュウゲルさながら、盲人が盲人をひき連れる不安につねにさいなまれる

この、ぐるりを囲まれた闇の壁のなかで

それでもわたしは書き、記さなければならぬのか

しかも壁は——、壁であることにとどまらず、塔になり、旧きはシナルの地のそれ、新しきはバルセロナのそれのように日日進化し、天にも届くばかりに聳えはじめたのだ

この、Iの町の一角で

——なんてことだ

冒険はこんなかたちでやってこようとは
うごくのみせかけ、ひとたび壁をとり払い、
またあらたな壁で蔽いつくされたIの町は、
異国へと通ずる蒼穹に向かつていま、うごき
はじめた

ぐずぐずなどしていられない

わたしも動きはじめねば

痙攣とともに、予感とともに

誰か、を追って

——そう、虚空は孤空ではない

わたしはいる

誰かもきつという

そのとき痙攣は——。

誰かを追って、天上の最上階で、水の対話が
実現するまで